

台湾大學側の発表（要旨）

『吉備津の釜』における賢妻から怨霊への変貌

李 欣倫

本質的には悲劇的な性格を持っていると言えよう。登場した女性たちの姿から、秋成の女性に対するマイナスのイメージが読み取れることも看過することができないと考えられる。

り きんりん／台湾大學 日本語学科大学院4年

キーワード：慳しき性、牝鶏晨す、弱い男、雄雄しい、悲劇的

日本の怪異小説の中で、群を抜いている『雨月物語』は江戸中期の国学者上田秋成の代表作である。本篇では女性の視点から「吉備津の釜」における両性の確執を考察した。

「吉備津の釜」の『五雑俎』による冒頭文を物語の結末に照らし合わせると、プロローグと物語全体の発展との間に調和が取れていないように思われる。私見では、『五雑俎』の一節の引用もこの作品のモチーフも、女の嫉妬の恐ろしさを強調することによって男性読者を戒めるものと考えられる。秋成は磯良を鬼に変貌させたことによって、女の慳しき性は理性的なものではなく、非人間的なものであることを強調しようとした。

「吉備津の釜」に登場した三人の女性の中に、磯良の結婚の話を進めた磯良の母がいるが、彼女は非常に重要な役割を担っている。彼女の「牝鶏晨す」式の決断から見ると、秋成は「弱い男」と「強い女」のコンビが常に不幸な結果をもたらすことを読者に戒めたいということが分かる。「吉備津の釜」に登場したもう一人の女性は遊女の袖である。袖についての描写は非常に少ないが、磯良と正太郎の仲に割り込んだ第三者としての袖は、話の発展にかなり大きな影響を与える役割を担っている。本篇では、袖の外見と性格を通して、正太郎の袖への感情を再考した。

「吉備津の釜」に見られる女性観は、どんな女でも「慳しき性」を持っているというものである。もし、男性が雄雄しい人物であれば、女の「慳しき性」も現れる余地がないはずである。秋成は磯良の女性像を通して、「慳しき性」の恐ろしさを男性読者に伝えようとした。この物語の結末の部分は、正太郎の無残な最期を通して、「男の奸たる性」は結局、罰せられなければならない、と世の男たちを戒めている。あくまでも男性への教訓を中心とする「吉備津の釜」は、しかし、女性への同情を示すものとは言えない。とにかくこの作品に見られる親子愛、夫婦愛そして男女の不倫愛は、